

医療関係者の皆様

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に関する NCGMセンター病院 がん総合診療センターの対応

通院頻度を減らし、抗がん剤治療の効果を保つ

新型コロナウイルスの感染が拡大し、全国に緊急事態宣言が発出されました。外来で抗がん剤の通院治療を続けられている患者さんも多いことと思います。外出の自粛要請下、抗がん剤の副作用である骨髄（免疫）抑制なども心配されていることと存じます。

治療効果を落とすことなく、外来抗がん剤治療を継続したい患者さんへ参考となるエビデンスについて、大腸がんを例にご紹介します。

1. 経口薬の方が静注薬に比べ白血球減少は少ない（免疫力を落としにくい）

静注薬（2週に1回の通院）と経口薬（3週に1回の通院）の比較試験で、白血球減少の頻度は経口薬を使った方が有意に低いという結果でした。下痢などの自覚症状が出た場合は、患者さん自身で経口薬を中断することができ、また通院回数も減らすことができます。

[https://www.thelancet.com/journals/lanonc/article/PIIS1470-2045\(13\)70490-X/fulltext](https://www.thelancet.com/journals/lanonc/article/PIIS1470-2045(13)70490-X/fulltext)

2. 急速ながんの増大傾向がない時に、抗がん剤の間隔を延ばしても治療効果は落ちません。

2週間に1回投与の抗がん剤を継続した場合と、2週間毎の抗がん剤治療を2か月間投与し2か月間休むという治療をした場合で、その治療効果には大きな差がなかったという研究結果があります。ご自身の病気の進行が急速に悪化している時期でなければ、担当医とよく相談の上、治療間隔を空け通院回数を減らすことができます。

[https://www.annalsofoncology.org/article/S0923-7534\(19\)38527-8/pdf](https://www.annalsofoncology.org/article/S0923-7534(19)38527-8/pdf)

3. 高齢者の大腸がん患者さんでは、静注薬併用療法の代わりに経口抗がん剤を投与することで治療効果を落とさずに骨髄抑制を回避し、通院回数を減らすことができます。

[https://www.thelancet.com/journals/lanonc/article/PIIS1470-2045\(13\)70154-2/fulltext](https://www.thelancet.com/journals/lanonc/article/PIIS1470-2045(13)70154-2/fulltext)

すべての患者さんにあてはまることはありませんが、現在、手元にある治療法や戦略を使って、個々の患者さんに最適な治療を提供することはできます。うまく休薬期間を使いながら最善の治療を継続していきましょう。

※2020年4月20日現在